

ル日航熊本にて、第五十一回日本移植学会総会を開催しました。参加者は一六〇〇名を数え、地方都市での開催にもかかわらず、極めて多数の参加を得ることができました。臓器横断的な学会であり、多くの診療領域医師や、移植コーディネーター、看護師、薬剤師、リハビリ職員など多職種が参集しました。「よりやさしい移植医療を目指して」というテーマで、厳しい移植医療の負担を減らしより多くの恩恵をもたらす道をみんなで探ることを目指しました。

特別講演として、山中伸弥京都大学教授(二〇一二年、成熟細胞の初期化と多能性獲得でノーベル医学・生理学賞受賞)、新見正則帝京大学准教授(二〇一三年、オペラを聴かせたマウスの心移植延長でイグノーベル賞受賞)、高橋政代理化学研究所プロジェクトリーダー(二〇一四年、自家iPS細胞由来網膜移植に成功)、黒崎信子医師(国境なき医師団日本、前会長)の四氏を招き、それぞれタイムリーかつ極めて興味深い講演をいただきました。山中先生は、iPS細胞研究所として目標としている、知財細胞ストック、臨床試験、患者由来iPS細胞利用が、順調に進行し、再生医療への臨床応用の普及や、創薬研究を目指しての展開が語られました。時にユーモアを交えてのお話は、中継会場を含めて立錫の余地もなくロビーにあふれるほどとなった聴衆を大いに沸かせました。また、理研の高橋リーダーは折しも、i

PS細胞由来網膜移植の臨床試験を実現されたばかりであり、困難な道筋と今後の意気込みを示されました。海外からの招聘講演は、世界移植学会会長のオーストラリアのO'Connell教授をはじめ五名の演者に依頼し、臓器提供システムや移植の教育システムなどについて、日本として学ぶべき点を示していただきました。会長講演では、「一修繕外科医が地域の大学で移植医療をやるということ 医療、臓器提供推進、教育で、「やさしさ」は追求できたか」という長いタイトルで、熊本でやってきた、小児外科を基礎とした移植医療の実態を反省込めて振り返り、今後の課題として、さらに「優しさ」を追求し、文科省大学改革促進事業に採択された「肝移植医療人の養成」プログラムを軌道に乗せて次代の専門家養成の道筋を描くことなど、を示しました。

移植医療の展開には臓器提供を含めた市民意識の変革も重要で、熊本城を移植のシンボルカラーであるグリーンにライトアップさせていただいたり、これまで臓器提供をしてくださったドナーの顕彰コーナーを設けたり、また総会終了直後に市民公開講座を開催するなど、社会的な企画もちりばめました。知事やくまモにも懇親会にご登場いただき、参加者は、プログラムのみならず、食べ物と熊本のすばらしさを堪能して帰っていただいたものと思います。直接間接に開催にご尽力いただきました関係の皆様は深く

御礼申し上げます。

第四十二回日本小児臨床薬理学会学術集会報告

熊本大学大学院生命科学研究部薬剤情報

分析学・教授

入江 徹美

崇城大学薬学部薬物治療学・教授

松倉 誠

熊本市民病院・副院長

近藤 裕一

第四十二回日本小児臨床薬理学会学術集会を平成二十七年十一月十四日(土)十五日(日)に、くまもと森都心プラザにて開催しました。本学術集会の熊本での開催は、今回で四回目になります。

これまでに、第十二回を松田一郎先生(熊本大学医学部小児科)、第二十回を中野眞汎先生(熊本大学医学部附属病院薬剤部)、第三十四回を松倉誠先生(崇城大学薬学部)がご担当されました。今回は、医学と薬学が強固なスクラムを組んで、小児薬物療法の充実に貢献することを標榜して、「こどもを守るシームレスな連携」をテーマに掲げました。当日は、会場の収容人員を超える三九四名の小児臨床の現場で活躍する医師、薬剤師などの医療関係者から各方面の基礎研究者、さらには薬事行政担当者など幅広い領域の関係者に国内外からご出席いただき、活発な学術集会を開催することが出来ました。

特別講演や教育講演として、「小児難治性疾患由来iPS細胞を使った創薬研

究」、「ゴーシェ病治療の新展開―経口ゴーシェ病治療薬」では、遺伝病治療に関するトランスレーションナルリサーチの最前線について、また、「小児の疼痛緩和―外用局所麻酔剤の概況―」、「NICUに入院している新生児の痛み」では、小児・新生児の疼痛コントロールの現状とその重要性について、現在開発中の薬剤の治験の状況を交えながら講演いただきました。シンポジウムは、「薬剤師と医師の連携による薬物治療の質の向上と医薬品開発促進」、「チーム医療における職域と教育」医師と薬剤師の分業と協業」および「小児患者のアドヒアランス・コンプライアンスを高める医薬連携と薬学的工夫」と題し、いずれも小児薬物療法における幅広い領域の関係者の「連携」や「協業」をキーワードにした先駆的な取組や熱い思いを紹介いただきました。さらに、小児薬物療法認定薬剤師に関連したプログラムとして「小児薬物療法薬剤師セミナー」、「プレナリセッション」、「一般演題」も含まれて、医学と薬学の縦糸と横糸が織りなす「タペストリー」を楽しんでいただけたと思います。

末尾になりましたが、本学術集会開催にあたり、早い段階からご協力やご支援を賜りました肥後医育振興会、熊本県医師会、熊本小児科学会、熊本県小児科医師会、熊本県薬剤師会、熊本県病院薬剤師会、熊本国際観光コンベンション協会、熊薬同窓会、各協賛企業の方々に感謝申